

『国立歴史民俗博物館研究叢書』

刊行のことば

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は、日本の歴史と文化を総合的に研究する大学共同利用機関ですが、歴史資料を収蔵し、研究成果を歴史展示というかたちで公表する博物館機能をも有しています。その特徴は、歴史学、考古学、民俗学および分析科学を加えた関連諸科学による文理連携型の学際協業によって、最先端の歴史研究を開拓し推進するところにあります。そして、「歴博といえば共同研究」と研究者間では言われるように、1981（昭和 56）年の機関設置以来一貫して、館内研究者はもとより多数の国内外の大学・研究機関などに所属する研究者と一緒に共同研究プロジェクトを組織して研究を進め、博物館機能を用いて、その研究過程・成果を可視化し、研究課題を高度化することで、学会コミュニティに貢献してまいりました。

たとえば、創設初期の1980～90年代は、外部の有識者による基幹研究検討委員会を設け、基層信仰、都市、環境、戦争などの大テーマを選定したうえで、実証的な研究を組織的に推進することによって学会をリードしてきました。2004（平成 16）年の法人化後は、博物館を有する研究機関としての特性をさらにはっきりと活かすために、研究、資料、展示の循環を重視した「博物館型研究統合」という理念のもとに広義の歴史研究を推進するというミッションを定めました。そして、総合展示のリニューアルを構築するための学問的基盤作りなどを行なう基幹研究を新しく共同研究のテーマに加えることにいたしました。

このように共同研究の課題は、それぞれの時代の学問的要請と外部の有識者の意見を踏まえて選択してきたのですが、共同研究の成果を広く発信・公開しようという姿勢は一貫して変わることなく、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号（以下『研究報告』）に集約し発表してまいりました。これらは、各研究分野の主要な学会誌の研究動向においても取り上げられ、一定の評価を受けてきております。

しかし、共同研究の最新の研究成果が集約されているこの『研究報告』は、専

門の研究者向けといった性格が強く、これから研究を始めようという大学院生・学生や日本の歴史と文化に関心をもつ一般の読者が手にとる機会は、残念ながら決して多いとは言えません。

現在、大学および大学共同利用機関においては、とくに人文科学分野の研究の可視化、研究成果の社会還元が強く求められています。そこで、第2期中期計画期間(2010～15年)内に推進された共同研究のなかから6件を選び、その後の研究成果を反映させるとともに、研究史全体での位置づけを明確にすること意識して執筆を行ない、ここにあらためて『国立歴史民俗博物館研究叢書』として刊行する運びとなりました。さらに、冒頭には、研究代表者による総論を設け、そこでは、それぞれ3年間におよぶ共同研究の成果の要点が読者に明確に伝わるようにいたしました。

本叢書は、朝倉書店の理解と協力を得て、第3期中期目標・中期計画期間の第一年目に当たる2016年度より刊行が実現することとなりましたが、歴博の創設に当たって学際協業による新しい歴史学の創成をめざした井上光貞初代館長の構想のなかには、すでにこのような研究叢書の刊行が含まれていたと伝えられています。創設三十周年を経た今、この本館設立時の初心に立ち帰り、本研究叢書の刊行に取り組みたいと思います。そして、本館の共同研究の水準を、あらためて広く社会に示すことで、研究史上の意義を再確認するとともに、新たな研究課題の発見に結びつけ、今後の共同研究として展開していく所存です。

読者のみなさまの忌憚のないご批判とご教示を賜りますよう、お願いいたします。

2017年2月吉日

国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩